

朝堂院朝庭の調査

—第163次

1 はじめに

調査の経緯 朝堂院は、藤原宮の中枢部にあたり、大極殿院の南に位置する回廊に囲まれた東西235m、南北320mの長方形の空間で、その中央にひろがる広場（朝庭）と、広場を囲むように立ち並ぶ12棟の朝堂からなっている。都城発掘調査部は、藤原宮中枢部の様相解明を目的として、1999年以降、継続的に朝堂院・大極殿院の発掘調査をおこなっており、2006年までの調査では、朝堂の配置や詳細な構造をあきらかにしてきた（第107・120・125・128・132・136・142・144次調査）。2008年の第153次調査では、大極殿院のすぐ南に調査区を設け、朝堂院朝庭に初めて本格的な調査がおよんだ。

第153次調査では、広場が礫敷であり、排水のために暗渠を設けて整備をおこなっていたことを確認した。また、東西に並んだ柱穴列など、宝幢を立てたと考えられる遺構が発見され、朝庭で挙行された儀式の一端を知る手がかりが得られた。さらに、藤原宮造営のために木材などの資材を運んだ運河が、宮北面中門から朝庭部にまでのびていることなどが判明した。

このように朝庭北端部における広場の利用状況と、宮の造営過程があきらかになったが、これより南側の朝庭の様相についてはなお検討すべき課題が残っている。

これを受けて、今回は調査区を第153次調査区の南に接して設け、朝庭中央部の整備や利用状況を確認すること、藤原宮中枢部の造営過程を解明すること、以上の2点を主な目的として、調査を実施した。調査区は東西50m、南北30mで、調査面積は1,500m²、調査期間は2010年4月2日から2011年1月24日までである。

2 検出遺構

調査区の基本的な層序は、上から表土、整備盛土（40～70cm）、旧耕作土・床土（25～60cm）で、その下が藤原宮期の礫敷層となる。現地表面から礫敷面までは0.9～1.1mである。礫敷下の整地土は、大きく2つに区分できる（第一次整地土・第二次整地土）。上層の整地土（第二次整地土・5～30cm）は灰褐色砂質土で、朝庭の本格的造

営にともなうものである。下層の整地土（第一次整地土・5～40cm）は暗褐色砂質土で、旧地形の起伏をならすために施されたものである。暗褐色砂質土の下は地山（黄褐色シルト、白黄色粘質土、緑灰色粘質土）となる。地山は北が低く、南が高い。また、調査区の西側約3分の2の範囲では、灰褐色砂質土の上に橙褐色砂質土（5～15cm）が確認できる。礫敷整備直前に、朝庭中央部分を中心に施された最終的な整地と考えられる。遺構検出は、礫敷層上面、橙褐色土上面、灰褐色土上面でおこない、4カ所に設けた下層調査区では、暗褐色土上面でも検出作業をおこなった。

今回検出した遺構は、藤原宮造営前、藤原宮造営期、藤原宮期、藤原宮廃絶後の4期に分けることができる。また、藤原宮造営期の遺構は、第二次整地造成前と造成後の、大きく2つに区分できる。以下、時期ごとに、主要な遺構について報告する。

藤原宮造営前の遺構（図101）

土坑SK10961 調査区中央やや南で検出した土坑。円形で、東西1.1m、南北0.7m以上、深さは60cm。西側部分にのみ20～40cmほどの自然石を積み上げており、現状で4段分が残る。埋土から6世紀後半の須恵器が出土した。これらの須恵器は、斜行溝SD10965出土のものと接合し、この土坑はすぐ北側を通るSD10965により上部を破壊されたと考える。

第二次整地造成前の遺構（図101）

先行朱雀大路東側溝SD10705 北と南の排水溝で確認した。調査区西端から13m東に位置する。幅1.3～1.5m、深さ50cm。第153次調査で検出した先行朱雀大路東側溝のほぼ真南に位置し、その延長部と考えられる。

南北溝SD10960 北と南の排水溝で確認した。SD10705から3.5m西に位置する素掘溝で、幅3.2～3.5m、深さ60cmを測る。第153次調査で確認したSD10796の南延長部にあたる可能性が考えられるが、溝幅はSD10796より1mほど広い。

運河SD1901A 北と南の排水溝で確認した。幅は、北側で7.5m、南側で4.5mを測り、調査区中央を南北に貫流する。藤原宮を造営する資材を運ぶための運河と考えられている。過去の調査（第18・20・148・153次調査）でも確認しており、今回の調査成果をあわせると、総延長は550m以上となる。

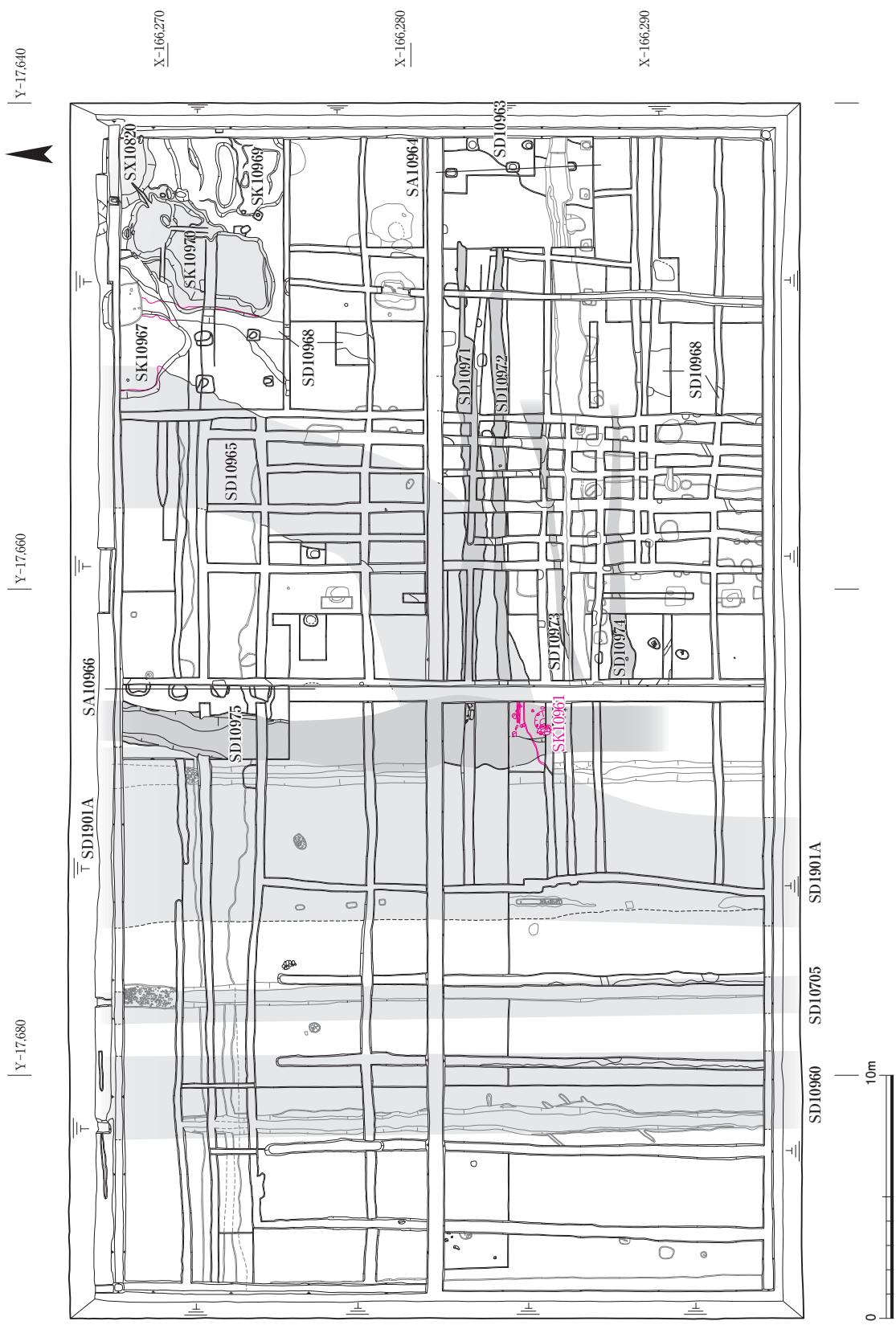


図101 第163次調査遺構図（下層） 1:250

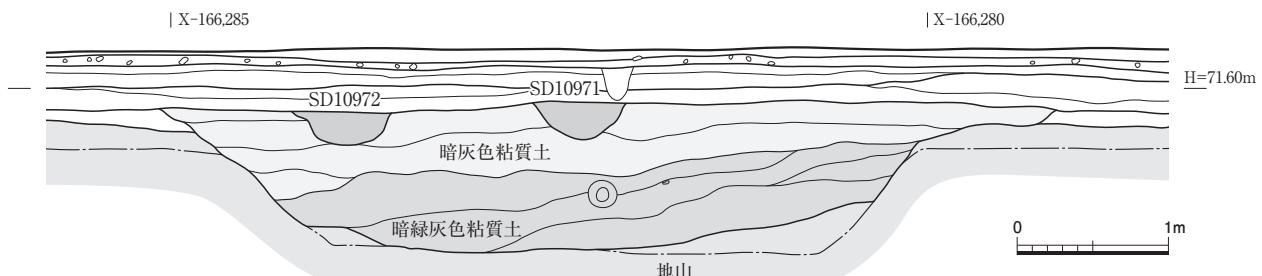


図102 斜行溝SD10965南北断面図（Y-17,664ライン） 1:50

斜行溝SD10965 調査区のほぼ中央から北東方向へのびる。幅4.5～5.5m、深さ1.0m。埋土からは部材や土器、礫が出土した。深さ、幅、埋土の状況などから、運河SD1901Aから枝分かれしているものと考えられ、調査区外北へと続く。

南北溝SD10963 調査区東端の中央付近で検出した幅2.4m、深さ60cm以上の素掘溝。溝の方向は北で東に若干振れており、調査区外東へ続く。

南北溝SD10968 調査区東寄りを蛇行しながら流れる素掘溝。幅1.0～2.0mで、深さ50cm。遺構の重複関係からみて、後述するSK10970より古い。

沼状遺構SX10820 調査区東北隅で検出した。第153次・160次調査でも確認しており、今回の成果をあわせると、南北44m、東西38m以上の規模となる。肩の一部を切り欠いて溝を設けており、南西にあるSK10970とつながっている。埋土には木屑や瓦を多量に含む。

土坑SK10970 沼状遺構SX10820の南西に隣接する不整形の土坑。南北6.1m、東西5.4mを測る。幅15cmほどの細い溝でSX10820の西南隅角とつながっている。細溝の底には流水を示す砂層の堆積を確認した。SX10820と一体となって機能していた土坑と理解できるが、具体的な性格は不明である。

土坑SK10969 SK10970の南東で検出した土坑。南北2.5m以上、東西3.6m以上で不整形である。深さは30cm。埋土に木屑・土器片を含む。

南北堀SA10966 調査区中央北端で検出した南北に並ぶ柱穴列。4間分を確認した。柱掘方はいずれも一辺0.7～1.0m、深さ70cmほど。柱間は約1.8m（6尺）。運河SD1901Aの肩に設けられた堀あるいは柵の可能性が考えられる。第153次調査では、SD1901Aの西肩に沿って並ぶ4基の柱穴列を確認しており（『紀要2009』）、それに

類似するものであろうか。

南北溝SD10975 調査区のほぼ中央で確認した素掘溝。運河SD1901Aを埋め立てた後に掘削されており、調査区南端より5～6m北側でとぎれると考えられる。幅は1.7～3.4mと一定しない。深さ20～30cm。SD1901Aや斜行溝SD10965など資材運搬用の溝を埋め立てた後の、広場における排水機能を担ったと考えられる。

東西溝SD10971～10974 調査区東南部で検出した素掘溝。いずれも幅0.4～1.0m、深さ15～25cm。SD10971・10972は、調査区東端から5mほど西でとぎれると考えられ、東には続かない。これらの溝は4条とも、SD10975に取り付き、広場の排水機能を担っていたと考える。ただし、SD10973は溝の方位が東で北に振れており、ほぼ正方位を向く他の3条の溝とは性格や時期を異にする可能性がある。

土坑SK10967 調査区東北部で検出した。南北3.2m以上、東西5.8m、深さ40cmで、土坑の北端は、調査区外に位置している。斜行溝SD10965やSK10970を埋めた後に掘削されている。

南北堀SA10964 調査区東端中央付近で検出した南北方向の柱穴列。2間分を確認した。重複関係より、SD10963より新しく、後述するSD10980より古い。検出できたのは下層調査区の範囲内のみであるが、さらに南北にのびていると考えられる。柱掘方は一辺0.4～0.5mで、柱間は約2.4m（8尺）。

第二次整地造成後の遺構（図103）

南北溝SD10979 調査区東南部で検出した。幅1.1～2.1m、深さ55cm以上。後述するSD10980にT字状に取り付き、調査区外に南へのびる。

東西溝SD10980 調査区東南部で確認した素掘溝。幅0.8～1.2m、深さ70cmで、溝の方向は東で北に若干振れる。

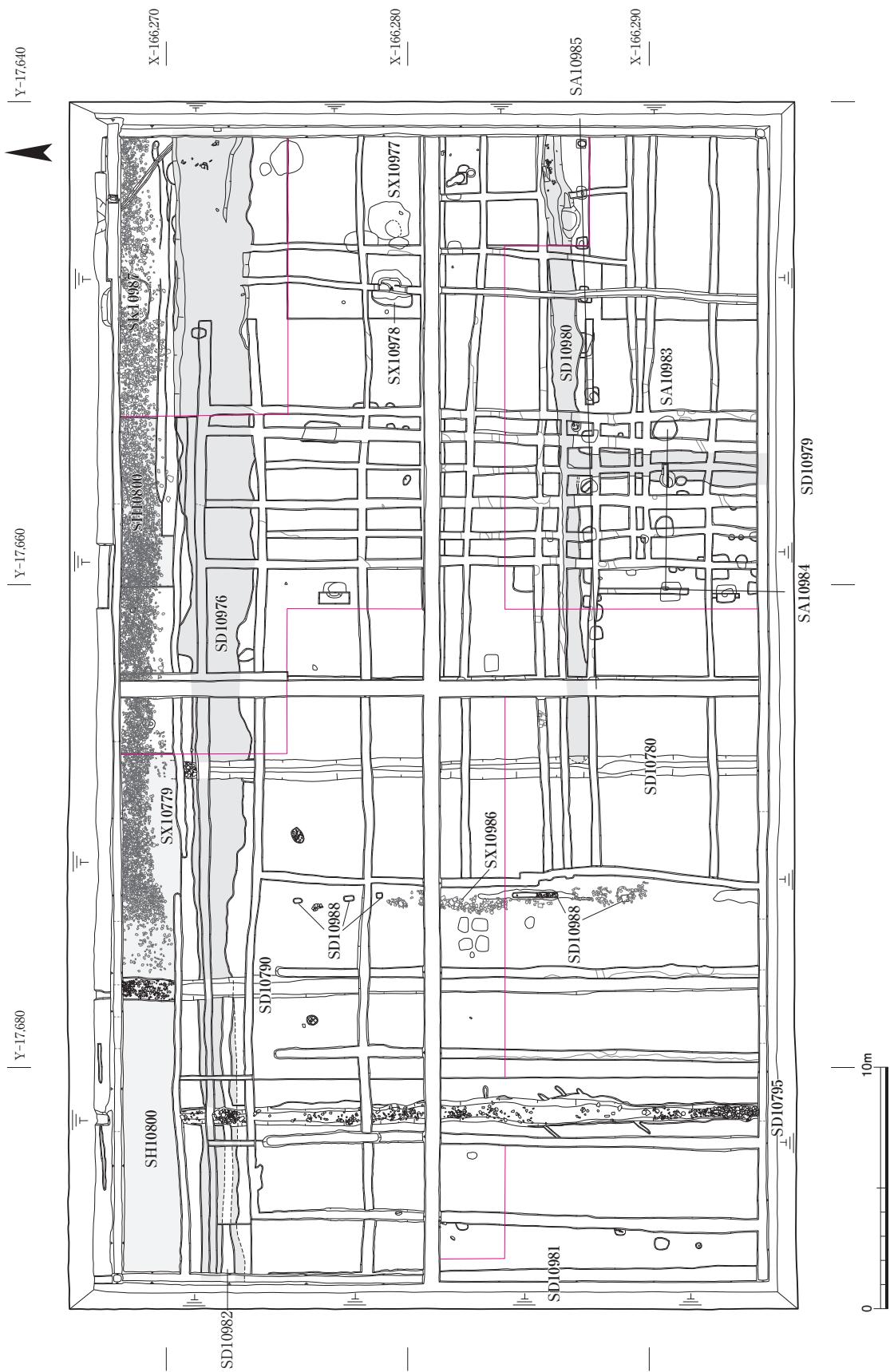


図103 第163次調査遺構図（上層） 1：250 （赤枠は下層調査区範囲）



図104 SD10980木樋・土器出土状況（北東から）

SD10979とT字状に取り付く。埋土より土器や木樋が出土した。ただし、この溝に木樋が使用されていたかどうかは不明である。

東西溝SD10976 調査区北側を東西に貫流する素掘溝。幅1.5～3.2m、深さ30～50cmで、東側が西側に比べ、幅が広い。排水と区画を兼ねた溝と考えられる。

東西塀SA10985 SD10980の南肩に沿って検出した東西方向の柱穴列。11間分を確認した。柱筋の方向は、SD10980と同様、東で北に若干振れており、この東西溝にともなう区画塀と考えられる。柱掘方はいずれも一辺0.5～0.7m程度、深さ40～60cm以上で、柱間は1.8～2.4m（6～8尺）。柱穴2基に柱根が残っており、柱径は12～14cm。

南北溝SD10795 調査区西端より8m東で検出した素掘溝。幅0.6～1.3m、深さ20cmで、大量の瓦とともに埋めている。溝底の標高は、南が高く、北が低い。第153次調査でも確認しており、大極殿院南門周辺の盛土を掘り込む。重複関係から、後述するSD10982より新しい。

南北溝SD10981 調査区西端に沿って検出した素掘溝。西肩は調査区外にあり未検出のため、幅は不明だが0.6m以上ある。溝の方位は北で西に若干振れる。深さ35cm。長さ23m分を検出し、さらに調査区外南へ続く。調査区北端より南6.5mの範囲では確認できず、この辺りでとぎれるか、あるいは西へ屈曲すると考える。重複関係からSD10976より新しく、後述するSD10982より古い。

南北溝SD10988 調査区西端より東17m付近で、南北に並ぶ長方形の遺構を5カ所確認した。幅はいずれも20

～25cmで、灰色粘質土または灰褐色粘質土で埋め、一部に瓦と礫を含む。深さは15～20cm。5カ所の遺構を一連のものとすると、南北長は約14mとなる。

東西溝SD10982 調査区西北部で検出した素掘溝。SD10976の埋立後に掘削され、幅0.3～0.6m、深さ15cm。後述するSD10790に取り付く。排水用の溝であろう。

東西塀SA10983 調査区東南部で検出した東西方向の柱穴列。3間分を確認した。SA10984に取り付き、L字状をなす。柱掘方は一辺0.75～1.0m、深さ50～80cmで、柱間は2.1～2.4m（7～8尺）。

南北塀SA10984 SA10983の西端から南へのびる南北方向の柱穴列。1間分を確認し、さらに調査区外南側へ続く可能性がある。柱掘方は一辺0.75～0.8m、深さ35cmで、柱間は約2.4m（8尺）。

柱穴SX10977 調査区東端中央付近で確認した。柱掘方は隅丸方形で、南北1.7m、東西1.6m。深さは50cm。

柱穴SX10978 SX10977の西側2.5mで確認した。柱掘方は隅丸方形で、南北1.7m、東西1.5m。深さは75cmを測る。SX10977・SX10978は、同程度の規模で、東西に並ぶ柱穴であるが、性格は不明である。

藤原宮期の遺構（図103）

広場SH10800 調査区の全面に広がる礫敷の広場。礫は径5～10cmで、灰褐色砂質土、あるいは橙褐色砂質土上面に敷かれる。朝庭中央に近い調査区西側の標高が高く東側が低い。また、南北間では、北が低く南が高い。なお、運河SD1901Aの存在した部分では、その影響を受け沈下している。礫敷は、標高の低い東側や、SD1901Aの影響により沈下した部分では良好に残存するが、標高の高い西側では、残りが悪い。後世の耕作などにより削平されたためであろう。

石詰暗渠SD10780 調査区中央から3m西で検出した南北方向の暗渠。幅0.7～0.9m、深さ10～15cm。内部に径10cmほどの大ぶりの礫を詰める。第153次調査で検出したものと一連で、今回の調査部分をあわせると総延長は50m以上となる。南北の溝底の高低差は15cmほどで、南が高い。朝庭機能時に雨水等を集め、北側へ流す役割を果たしていたと考える。

南北溝SD10790 SD10795の東5.5mで検出した。幅0.8～1.0m、深さ20cm。第153次調査でも確認しており、礫と砂で埋めている。埋土からは、多量の瓦が出土した。

瓦敷SX10986 SD10790の約4m東で検出した。南北に帯状に瓦が敷かれている。長さは約11mで、幅は0.5~0.9mである。運河SD1901Aの影響で沈下した部分の西肩に沿うようにのびている。

藤原宮廃絶後の遺構（図103）

通路状遺構SX10779 調査区北端に沿って検出した。東西方向に瓦と砂を敷きつめる。第153次調査区の南端で検出したものと一連で、今回の調査成果をあわせると、幅は2.5~5.5mを測り、西側へいくにつれ細くなる。今回の調査区内では、調査区東端から34mほど西で途絶するが、第153次調査区では、調査区西端まで伸びている。使用されている軒丸瓦は、主に朝堂院回廊や大極殿院南門・回廊に葺かれていたものであるが、この遺構と藤原宮期の礫敷面との間には灰褐色砂質土の間層があるため、藤原宮期より後の時期に設けられたものと考える。宮廃絶後に廃棄されていた瓦を転用したものであろう。

土坑SK10987 通路状遺構SX10779を除去した後に検出した楕円形の土坑。第153次調査で北辺部を検出しており、その部分をあわせると、南北2.2m、東西2.0mの大きさとなる。深さは1.2mで、礫敷面からほぼ垂直に掘り込まれている。埋土最上層には瓦が多量に廃棄されていた。

（若杉智宏）

3 出土遺物

金属製品・木製品など 鉗具の板金具片が第二次整地土から出土した（図105）。残存長2.7cm、幅2.2cm、厚さ1.2mm。直径2mmの孔を3ヵ所穿孔する。表裏とも黒漆が残存している（漆の分析は降幡順子による）。

SD10980からは木樋が出土した。左右の側板と底板の一部が残り、残存長は62cm。高さは15cm。また、加工木片・削屑が沼状遺構SX10820・土坑SK10970から多数出土した。植物遺体は、SX10820・SK10970などから種子が少量出土したほか、調査区各所から計140点以上のモモの核が出土した。なかでもSK10970(49点)、SD10976(33

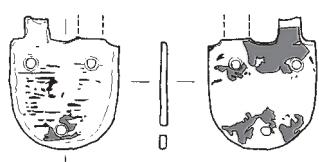


図105 鉗具板金具片 2:3

点)、SK10967(22点)、SD10963(10点)に多い。

そのほか碁石3点、石鎚などのサスカイト製石器15点、石庖丁未製品と磨製石斧が各1点出土した。（石橋茂登）

動物遺存体 第二次整地土から、ウマの歯が出土した。（山崎 健）

木簡 沼状遺構SX10820から木簡1点が出土した（図106）。上端折れ、下端・左右両辺削りで、左辺の下部は一部欠損する。板目。縦方向に割れた2断片が接合する。□〔作カ〕と判断した

1文字目は、文字の上半部が削りとられ墨痕は残らない。2文字目の□〔物カ〕も旁の一部を欠く。一筆の文字と判断するが、字間の余白部分がかなり大きいことから、熟語となるかは不明といわざるをえない。（山本 崇）

瓦類 プラスチックコンテナ201箱分の瓦類が出土した。出土した瓦は、軒丸瓦84点、軒平瓦137点、面戸瓦55点、熨斗瓦10点、隅切瓦1点、隅木蓋瓦2点、ヘラ描平瓦42点、ヘラ描丸瓦5点、丸瓦4,064点(472kg)、平瓦27,057点(2,287kg)である（表14）。以下では、造営期の遺構出土の軒瓦と、宮廃絶後に廃棄された軒瓦に分けて述べる。

①造営期の遺構出土の軒瓦 造営期の遺構や整地土から出土した軒瓦に触れておく（表15）。運河と同時期か、その埋立時までは存在したと考えられる沼状遺構SX10820やSK10970からは、大垣所用瓦の6274（AbあるいはAc）も出土するが、文様や製作技法の観点から相対的に新相と考えられている諸型式（6642A、6642C、6643B、6643D）も出土している。また、その後の整理作業の結果、第153次調査のSX10820の下層埋土にあたる木片混じり暗褐土からも、新しい特徴をもつ6643C-IIグループと6643Dが1点ずつ出土している。これらの瓦の評価は宮造営過程を考える上で今後重要なであろう。

②宮廃絶後に廃棄された軒瓦 軒瓦は、通路状遺構SX10779およびそこに由来して床土中に含まれていたものが過半を占め、その多くが顕著に摩耗している。軒丸瓦には6275A、6279Abが、軒平瓦には6642A・C、6643Cがとりわけ多い。6275Aを既存の3段階区分（『年



図106 SX10820出土木簡

表14 第163次調査出土軒瓦および道具瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦					
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6233	Aa	1	6275	B	5	6561	A	1	6643	B	7
	Ab	1		C	3	6641	A	1		C	21
	Ac	1		I	2		C	3		D	4
	B	1		—	5		—			隅切瓦	5
	Ba	2	6278	C	1		E	5		隅木蓋瓦	2
	—	4	6279	Ab	9		F	1	6646	D	1
	B	1					—	2	6647	A	1
6273	C	1								ヘラ描平瓦	42
	—	1								ヘラ描丸瓦	5
6274	A	7	6281	A	1	6642	A	10			
	Ab	4		B	1		B	1			
	Ac	1		—	1		C	1			
	A	16			13		D	2			
計 84			計 137			計 115					

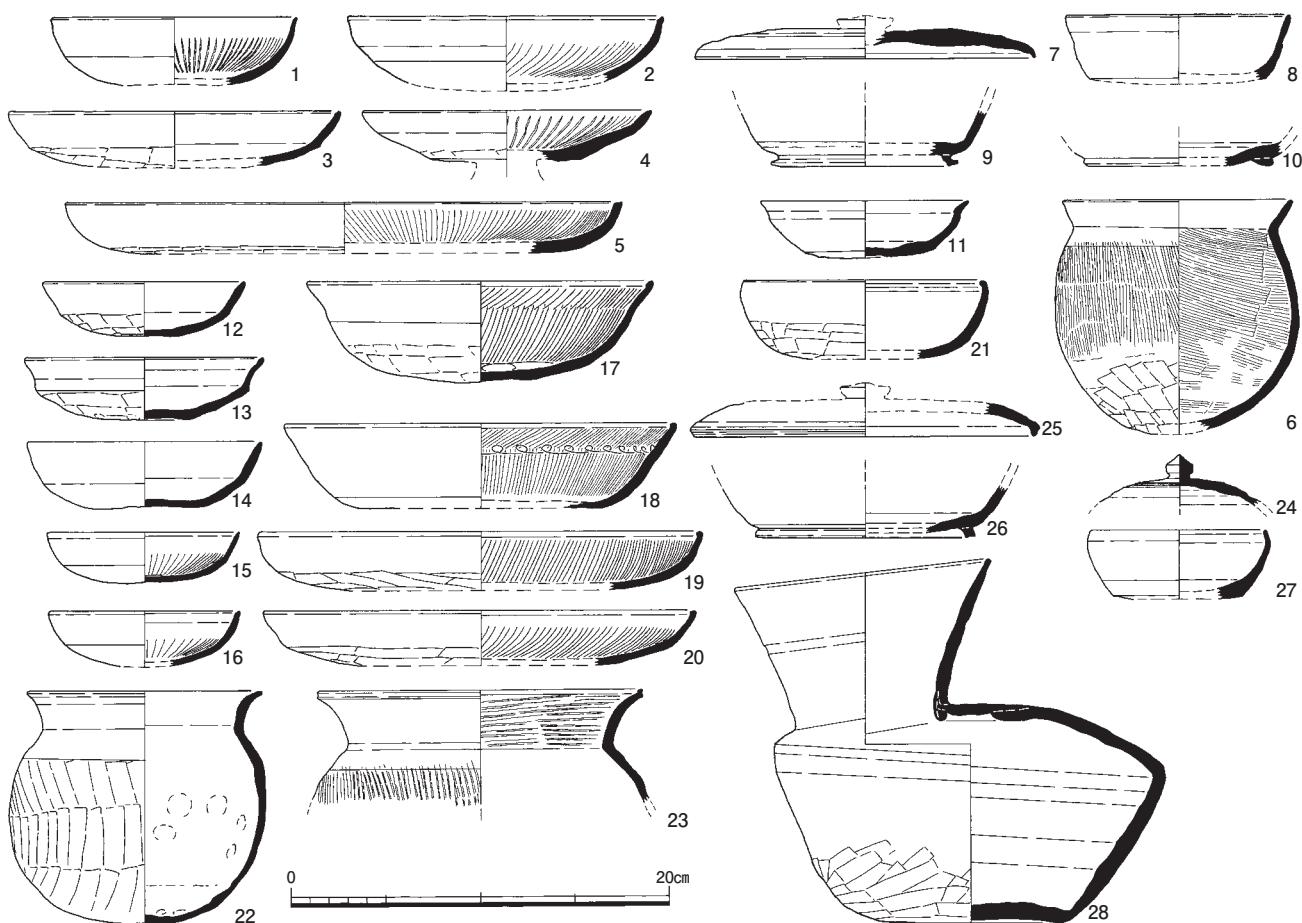


図107 SX10820・SK10970・SD10980出土土器 1:4 (1・3~5・7は第153次調査出土)

報 2000-II』)に基づき分類すると、相対的に新しい第2・3段階のものが主となる。6643Cも胎土や製作技法からみて時期差をもつとされる2グループに分けられており(石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010)、ここでは両者がほぼ同程度含まれる。この傾向は、北に接する第153次調査区(『紀要2009』)のSX10779出土瓦についても概ね同じである。調査区内に瓦葺建物は存

在しないため、当然これらの瓦は朝庭を囲んで存在した建物群に由来する。

既往の調査成果からみて6275A-6643C、6279Ab-6642C(図108)は朝堂院回廊や礎石建物SB530の所用瓦であり、6642Aについても、今回はほとんど出土していない6233Baとセットで朝堂院回廊に葺かれたとされる(『年報2000-II』・『紀要2001』)。ただし本調査区東側

表15 藤原宮造営期遺構および朝庭整地土出土軒瓦集計表

	型式	SX10820	SK10970	SD10976	SD10981	SD10795	SD10790	第二次 整地土	計
軒丸瓦	6273C	2				1			1
	6274A							1	2
	6274C							1	1
	6275A					1	1	1	2
	6275B				1			1	1
	6275C				1			1	1
軒平瓦	6279Ab				1		1	2	2
	6561A	2				1			1
	6642							1	2
	6642A							1	3
	6642C		1			1			2
	6643Aa						3		3
	6643B		2						2
	6643C							1	1
	6643D			1		1			1
	6643						2		2
	6647				1			1	1
	6647A				1			1	1
	6647C					1		1	1
	6647D				1	1		2	2
重弧文					1			1	1
計		6	4	1	4	9	5	4	33

で朝堂院回廊との間に位置する東第一堂・第二堂の所用瓦6281A-6641C、6281B-6641Fは少ないので、本調査区の通路状遺構の瓦はむしろ北側に近接する大極殿院南門・南面回廊からもたらされたと考えたほうが合理的である。南門跡の調査で出土した軒瓦には6275A-6643Cが一定数含まれるとともに、軒丸瓦6279Aa・B、6273A・B、6274Ab・Ac、6281Aと、軒平瓦6641Eが、同程度の数含まれる（本書92頁）。特に、大極殿院各所の所用瓦とされる6273A・B-6641E、朝堂の所用瓦6281Aもある程度出土している点は看過しがたい。これらも南門・南面回廊所用瓦であった可能性は十分考えられる。

以上をふまえ、現時点では次のように考えておきたい。大極殿院南門（第148次調査）出土瓦の比率をもとに大極殿院の他の地区の所用瓦も考慮して復原すると、大極殿院南門・南面回廊の所用瓦には6275A-6643C、6273A・B-6641E、6281A-6641Eが含まれていたと考えられ、通路状遺構や大極殿院回廊東南隅出土瓦（『紀要2010』）を考慮すれば6279Ab-6642Cも同時に採用されていた可能性がある。組み合わせが4セット多いのは、南門と回廊で所用瓦が異なっていたことを示しているとも考えられる。今までの出土傾向から6273A・B-6641E、6281A-6641Eが南門、6275A-6643C・6279Ab-6642Cが回廊に主に使用されたとみれば、本調査区の

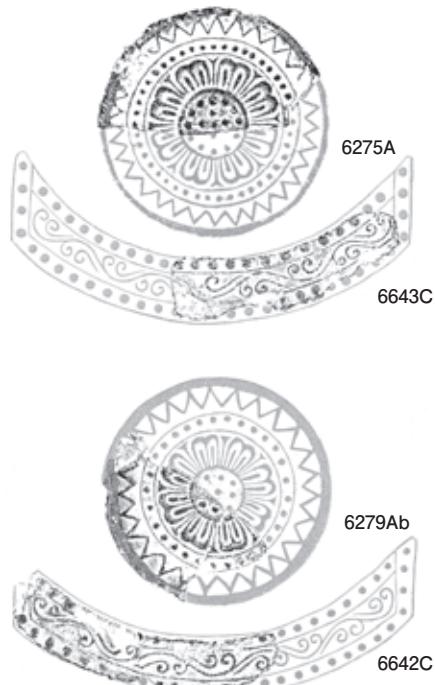


図108 第163次調査出土瓦

通路状遺構にはもっとも近接する後者の瓦が多く利用されたとの説明も成り立つ。
(森先一貴)

土器・土製品 調査区からは整理木箱48箱分の土器が出土している。古代の土師器・須恵器を主体として、硯、土馬、埴輪、縄文土器などがある。これらの土器は、礫敷直上および第二次整地土から出土したものが大半を占める。ここでは比較的まとまった資料が出土した沼状遺構SX10820およびそれに付属するSK10970と、東西溝SD10980の土器について報告する。

SX10820およびSK10970からは、土師器杯A、杯C（1・2）、杯H（3）、皿A（5）、高杯C（4）、甕（6）、須恵器杯A（8）、杯B（7・9・10）、杯X（11）、高杯、甕などが出土した。1・2はともに底部不調整。1の暗文はやや太い。4も暗文がやや太く、一部施文に搖れがみられる。5は口縁端部に面をもち、底部外面にはヘラケズリを施す。6は小形甕A。内湾する口縁をもち、胎土は白っぽい。体部は外面下半がケズリ、上半がタテハケで、内面下半はハケ後ナデ、上半はヨコハケ調整である。体部外面下半には、底部中央付近を除き、リング状に薄く煤が付着する。近江型。11の高台は太く低平な形状を呈す。11は口縁部がナデにより外反する。底部はヘラキリ不調整。口縁の一部に灯明痕が残る。

SD10980からは、土師器杯A（18）、杯C（15・16）、杯

G (14)、杯 H (12・13)、皿 A (19・20)、椀 (21)、高杯、甕 (22・23)、須恵器杯 A、杯 B (25・26)、椀 (27)、壺蓋 (24)、平瓶、横瓶、甕などが出土した。なお、土師器杯 A (17)・須恵器平瓶 (28) はSD10980上方の耕作溝掘り下げ時に出土した個体であるが、層位や出土位置を再検討した結果、SD10980にともなう可能性が高いと判断した。17・18は杯 A。深さに差がみられるが、同一時期の資料であろう。いずれも 2 段放射暗文をもち、18には上段と下段の境に連弧状暗文が入る。17は口縁外面に粗いミガキを施す。15・16は杯 C III。いずれも底部不調整。15は径高指数21.6。14は杯 G。底部には凹凸が残り、形状は椀 C に近い。13はナデにより口縁が強く外反し、底部外面にはユビオサエによる凹凸がある。19・20は口縁形状に差がみられ、19は口縁端部内面が肥厚し丸くおさまり、20は口縁端部に面をもつ。両者とも底部外面はヘラケズリ調整。21は口縁端部が肥厚し、底部外面にヘラケズリを施す。22は、口縁は内外面ともナデで仕上げる。体部外面は板ナデ調整、内面はナデだが、指頭圧痕が残る。体部外面下半には、底部を除き薄い煤が付く。23は口縁端部を摘み上げ、体部外面と口縁内面はハケメ調整。27は椀。平底で、内湾する口縁をもつ。軟質で、底部外面以外が暗灰色を呈す。24は壺蓋。宝珠形のつまみを有し、天井部にカキメが入る。28は平瓶。口縁は大きくひらき、肩が若干張る。体部外面下半を手持ちケズリ調整し、底部はナデで仕上げる。内面には白色付着物がみられ、特に肩付近が顕著である。

これらの土器はいずれも藤原宮造営期のもので、1～11は第二次整地造成前、12～28は礫敷整備前の遺構にともなう資料である。飛鳥IV～V段階の土器群で、藤原宮成立直前に使用されていた土器様相の一端をうかがうことができる。

4 まとめ

今回の調査では、藤原宮の造営過程と、藤原宮期の朝庭の状況が具体的にあきらかとなった。主な成果を以下にまとめる。

運河と斜行溝 運河SD1901A から斜行溝SD10965が支流として派生し、北東方向へのびていることがあきらかとなった。斜行溝の性格としては、造営資材を朝堂院の必要な場所に運ぶための役割が考えられる。運河から枝分

かれする溝は、第153次調査でも確認されていたが（『紀要2009』）、今回の調査でも、これまで知られていない大規模な支流が朝庭部分に存在していることが判明し、造営時の資材運搬に水運が重要な役割を果たしていたことが再確認できた。

沼状遺構 調査区北東部で沼状遺構SX10820の西南隅部分を確認した。第153次・160次調査の成果とあわせたところ、この沼状遺構は、南北44m・東西38m以上という非常に巨大な遺構であることがあきらかとなった。また、沼状遺構の埋土からは破損した瓦や削屑と考えられる木屑が多量に出土した。このことから、沼状遺構が宮造営の進行時に機能していたこと、造営資材の加工が遺構の周囲を使っておこなわれていたことが推測でき、藤原宮造営時の具体的な状況を復原するための手がかりを改めて得ることができた。

複雑な造営過程 運河など資材運搬用の溝を埋め立てた後にも、幾度かにわたり、排水や区画のための溝や堀を造っていることを確認した。遺構の重複関係や第二次整地土との層位関係から、これまで考えられていたより、多くの作業工程が復原でき、より複雑な宮造営過程があきらかになった。

広場の整備状況 今回の調査区でも、広場SH10800が礫敷で整備された状況を確認した。朝庭中央部にあたる調査区西側の約3分の2の範囲には、橙褐色の整地が第二次整地土の上に施されており、そのため標高は西側が高く、東側が低くなっている。広場全体の中でも、中央付近を周辺よりも重要視して入念に整備を施していくと理解できる。また、礫を詰めた南北暗渠SD10780・SD10790を配し、広場の排水をおこなっている状況も再確認できた。SD10790は、先行朱雀大路東側溝SD10705のほぼ真上に位置しており、礫敷整備の段階においても、朱雀大路に相当する部分が、南北溝により区画されていた可能性が考えられる。

（若杉）

今回の調査に関して、2010年7月の報道発表・現地説明会時に大嘗宮の可能性を指摘しました。これについては、その後継続した調査で検証した結果、多くが柱穴でないことが判明し、同年11月に訂正公表いたしました。この7月段階における誤った発表は、10ヵ月におよんだ全調査期間の一連の調査過程において、遺構各個の確定作業に入る前の中途段階で発表したことに原因があります。今後は、よりいっそう慎重な調査を進め、また的確な公表をするべく努めたいと考えています。

（深澤芳樹）